

「この時のために！」

エステル記4:10-16

■ エステルが導かれた

エステルはユダヤ人で、ペルシャに捕囚され、首都スサに暮らしていました。エルサレムへの帰還が許されたこの時代にペルシャに残るユダヤ人は人口の20%。当時の大帝國ペルシャのアハシュエロス王は127州を統治していました。

王は家臣や各州の首長たちを集めて国の富や榮譽を誇示して半年間の宴会を行いました。半年の後、全ての働いた者のために宴会を行い、その宴会7日目に、王はワシュティの美しさを民に見せるために、王冠をかぶって王の前に来るように家臣に命じました。ワシュティ見世物にされることを拒みしました。王は憤り、ワシュティは追放されることになってしまいました。ワシュティを追放した後、寂しくなった王は、新しい王妃を迎えるため、国中から容姿の美しい候補者を探すことになりました。首都スサで、姿も顔立ちも美しいエステルを見つけ、スサの候補者として、エステルが選ばれました。

エステルは両親が死に、父の兄弟のモルデカイに養育されていましたが、モルデカイからユダヤ人であることを明かさないうに指示され、素性を隠し続けました。

■ エステルの内面の美しさ

エステルは王妃になる準備のため、1年間候補者とともに集められて暮らすことになりました。

その暮らしの中で外見だけでなく、内面の美しさが家臣達にも好感を持たれ、特別な待遇を受けていました。

そうして1年後、候補者たちは、順番に王と面会することになりました。その際に、身に着ける必要なものは与えられるので、他の候補者は、綺麗に見られるために様々な飾り物を望みました。そんな中、エステルは何も望みませんでした。王はエステルに魅了され、王妃とすることに決めました。

エステルは外見の美しさだけではなく、内面の美しさも持ち合わせていました。従順で謙遜、賢く、欲がなく、勇敢で大胆さがありました。エステルが神様の土台に生きていたから現れた美しさでした。

■ 神の見えざる手が働いている

その頃、モルデカイは家臣が王の暗殺を企てているのを知りました。彼はこれを王妃エステルに伝え、エステルはモルデカイの名前を出して王に告げ、王は暗殺を免れました。

王の側近にアガク人ハマンがいました。家臣はハマンが通ると頭を下げましたが、モルデカイだけはそうしませんでした。アガク人を含むアマレク人はイスラエルの民を憎む歴史的な背景もありましたが、ハマンの憎しみは次第に大きくなりました。ハマンは彼だけではなく、国中のユダヤ人を全て根絶やしにしようと、計画を進め、各州に命令を出してユダヤ人を殺すように指示を出しました。

ユダヤ人殺戮の時は「くじ」で12ヶ月後と決まりました。

■ 覚悟を決めたエステル

モルデカイは家臣を通じてエステルにこの計画をやめるように頼んでほしいと伝えました。

「もし、あなたがこのようなときに沈黙を守るなら、別のところから助けと救いがユダヤ人のために起こるだろう。しかし、あなたも、あなたの父の家も滅びるだろう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」(4:14)

王の命令以外で王のところに行く者は死刑にされる、エステルはその時まで30日間、王に呼ばれていない状態でしたから、そのことを行うのは死を覚悟しなければなりませんでした。

「行って、スサにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食してください。三日三晩、食べたり飲んだりしないようにしてください。

私も私の侍女たちも、同じように断食します。そのようにしたうえで、法令に背くことですが、私は王のところへ参ります。私は、死ななければならないのでしたら死にます。」(4:16)と答えました。

そして、王の前に出た時、王はエステル謁見を受け入れました。王は愛するエステルにどんなことでも願うように言いました。しかし、時ではないと判断したエステルはそこでは告げず、主催する宴会に王とハマンを招きました。

ハマンは家臣の中で自分だけが王妃エステルの宴会に呼ばれたことを大喜びし、周りの人間に自慢しましたが、この時にもモルデカイが頭を下げないことに憤り、1年を待たずに、モルデカイを首つりにすることを決め、首吊り用の柱を立てました。

■ その頃王は

王は宴会の前夜に眠れなかったので記録の書、年代記を読むことにしました。

王はモルデカイに命を助けられたのに榮譽を与えていないことに、この時気づき、王に謁見に来た（柱でモルデカイの首を吊る許可を取りに来ていた）ハマンに何を与えればよいか尋ねました。ハマンは王が榮譽を与えたいのは自分だと思ったので、その榮譽が受け取れるように「王服を着させて、王の馬に乗せ、王冠をかぶせて町の中を凱旋させる」ことを提案しました。しかし、王が榮譽を与えたのはモルデカイだったのです。

■ 神の時が来た

2日目の宴会の席でエステルは王から求めるものを尋ねられ、「ハマンがユダヤ人を根絶やしにしようとしている、民族を助けてほしい」と願いました。王はそれを聞くと、憤って宮殿の庭に出ました。その間、ハマンはエステルに必死で命乞いをしました。戻った王はその姿を見て、エステルに乱暴をはたらこうとしていると勘違いしたのです。

そうしてハマンは自分で準備した柱で首吊りにされることになってしまいました。ハマンの一族もみな処刑されました。

王は命令を取り下げることはできないため、ユダヤ人は命を守るために、返り討ちを行って命を守って良いと、法令を出しました。こうしてユダヤ人は絶滅を免れたのです。

ユダヤ人の命が守られたことを祝う祭りは、くじ（プル）を引いて決められたことから名をとって「プリム」と呼ばれ、今でも続けられ、この祭りの日には家々でエステル記が読まれています。

■ 私達もエステルのように生きる

エステル記には神という言葉が出てきませんが、神の見えざる手が働いていることがわかります。

神の主権が働くなら、人間的に動く必要はありません。御心を神の時に任せることができるように、神に従順に聞き、導きを感じて動くエステルのようにでありたいです。

→神様はきよい器を用いられる

エステルは両親がおらず、奴隷でした。聖い器に家柄や育ちは関係ないということです。

私達の器が聖くないと思えるなら、それはコップにジュースを注ごうとした時にワカメがついているようなもの。聖くない器にジュースを注ぐのは抵抗があります。私達が聖いコップであることができるように、汚れを取り除きましょう。

→信仰を持って天の価値観で生きていく人に。

私達ひとりひとりに神様は将来と希望を与える計画を持っておられます。神の計画が成るようエステルのような姿で生き、神の時に用いられることができますように。

誘惑に負ける弱い私達が、神様の前に聖さを選ぶ決断をし続けることができますように。

神の計画がなるように、日々を、従順に生きることができるよう、今日心に与えられた決断を守ることができますように祈ります。

(要約者: 藤原 友規子)

(2025年1月19日)